



戦争はこれから

編輯局次長 萩野伊八

日本人はお互に気が短いから何事を處理するにも頗る性急だ。尤もこれは唯日本人ばかりでなく、敵米も然りである。戦争は本年が峠だと觀察する人も一部にはあるやうだが、敵米國でも戦争は何れにしても最早峠を越したとなして紐育株式市場もこの二、三週間來戦争株を一齊に賣放つて自動車株を首班とする他の各種の平和事業株へ買氣が集中してゐるやうだ。陸海軍の兵器の生産額にしても、この一、二ヶ月以來は何れも豫定よりも二乃至三割方低下して、陸海軍首脳部に甚だしく氣をもませ

てゐる。敵の戦争指導者達が聲を大にして最近呼號してゐるやうに、太平洋の戦局は敵がわが支關口サイパンまで押し寄せて來てゐるもの、眞實の日米決戦はいよいよこれからなのだ。唯簡単に戦争はこれからだとは非常に屢々何人の口からも容易に出るところだが、この意義は頗る重大である。我國の爲政家も、言論機關も、最近は擧げて激烈な形容詞を使つて、超非常時を説き、國防態勢の強化を力説してゐる。しかしながら如何もその言ふところ、考ふところ如何にも空念佛に過ぎないやうな印象を受ける。これはいつた如何なる原因によるものだらうかと深

く考へてみるに、われわれは歐米人と違つて、異教徒と異教徒との慘烈なる闘争、或ひは同一國內における異民族と異民族との執拗にして苦烈なる抗争といふものを生活體驗として持つたことがないのだと思ふ。諸君は試みにソ聯へ行つて見給へ、またバルカンに、近東に、亞弗利加に、中南米に、そしてまた米國に、將また中央歐羅巴に行つて見給へ、其處では永い歴史の過程において如何に深刻な宗教上の争ひが、そして民族間の争ひが繰り返されてゐることか、吾等一君萬民の永い歴史をこの温帯國に安穩に生存を續けて來た大和民族から到底想像を許さぬものがある。われわれはこの點を再三再四反省すべきである。毎日の新聞記事を読み、ラジオその他による指導者の説教を聴いても、そこには最上級の形容詞を以つて航空機増産は主張され、食糧確保の必要が強調され、一億戰闘配置への即時展開が叫ばれてゐるが、それが眞に民族興亡を賭したものであることの理解に缺けてゐるやうである。もちろん皇軍將士の勇猛果敢さについては敵國側でさへ無條件に認むるところで、それは問題でない。問題は銃後における政治家な

Table with subscription information: 號二十八第, 月七年九十和昭, 行發日五十月, 錢五部一價定, 錢十六(共稅)分年, 覺川藤, 園公谷比日區町都京東, 社信通盟同, 社信通盟同, (〇七京東)

らびに一般國民である、政治のやり方および國民のこれの受け方が未だに平時的なところが多分にあると思はれる。勤勞動員の仕方も

敵機はいよいよわが本土に襲來した。日米決戦はいよいよこれからである。この決戦に日本は必ず勝つ。何故か。一、今までの戦ひは航空母艦と航空母艦との戦ひであつた。わが方に基地ありとはいへ、それは本土を遠く離れた絶海の孤島であつた。陸地とはいへ、それは航空母艦の二隻か三隻にしか當らない。これに對し、敵は五倍、十倍の航空母艦、戦艦をもつて襲ひか

かつてきたのである。しかもわが皇軍將士は、この大敵を向ふにまはして勇猛果敢、敵のわが本土に連二無二迫らんとあせる『時』を支へてきたのである。今日までわれわれにあたへられた『時』は、實にわれらの骨肉同胞が身をもつて闘ひ、血をもつて贖つたものである。この『時』の戦ひにおいて發揮した皇軍將士のまげに魂、敢闘精神こそ、まさしく敵の心膽を寒からしめたものである。二、しかし今やこの地位は頗

もが大量に婦人が動員されてゐる。食糧配給問題にしてもさうだ。これも隣りのソ聯を見給へ、國民殆んど全部は平時から燕麥で造つた黒パンと鹽と水だけである。これで二十年も三十年も、否二百年も三百年でも頭張つて來たのだ。これは温帯國に育つて來たわれわれ日本人としては此際猛反省を要するところである。尤もわれわれは、世界でも定評のある通り一般に死を看る事斷ず

倒した。これからの戦ひは、敵の必沈航空母艦と、われの不沈航空母艦との戦ひである。何をか不沈航空母艦といふ。悠久三千年の歴史に輝く皇土神州これである。嘗ては祖先に生み育つたわれ、いまはわれを生み育くみつゝある祖國日本の地、これこそ永久に、絶対に沈むことなき航空母艦である。敵アメリカは豪語して曰く、今年末までに百隻の航空母艦を太平洋に浮

べんと。しからはわれは全國津々浦々を基地として、本土を數百隻の航空母艦と化さむ。彼數百をもつてすれば、われは千をもつてこれに當らう。敵は必沈、われは不沈。しかも彼は腕彎一萬キロの補給路を辿る無名の遠征である。われは祖國の地、自存自衛の大義の師である。必勝の基礎嚴乎としてここに存す。三、この絶対不沈の母艦が擁する乗員は、ことごとく賊を決

觸か殆んどなかつたので、その間に入つてもまれる機會がなかつたからである。毛唐共の生に對する執着は非常なもので、それこそ動物的なそれである。それは彼等が過去幾世紀にも亘つて、各種の自然的な、或ひは人的な試練を経て來てゐるからである。これを要するに、我國は政治家も國民も一般的に國際的な訓練に乏しいといふことが、この民族興亡を賭した大戦争に、食糧配給が

して敵撃滅に立ちむかふ神兵である。敵の乗員には限度があるわれには盡くるところがない。一億みな兵である。これに要する機材の多寡を論ずるを止めよわれら一億必死の創意と工夫とは、皇國日本の土を木とも木とも、ことごとく飛機と化さずには置かないであらう。永久に沈まざる母艦と、必ず沈む敵艦と、盡くることなき神兵と、限りある敵兵と。勝敗の數はおのづから明らかである。

強實に世界に比類なきに對してをや。しかも開戦の勢頭、敵イギリスが世界に誇つたプリンス・オブ・ウェールズとレパルスとをマレー沖の戦に海底の藻層と化し、彼らの謂ふ不沈つひに必沈なることを全世界に知らしめたものは、實にわが空の神兵ではなかつたか。(七月八日大詔奉戴日)

不沈と必沈 古野伊之助

古野社長は、サイパン島の皇軍全員戦死の悲痛なる大本營發表のあつた翌十九日午前七時より、東京中央放送局より約二十分に亘り全國に放送、『重大時局に直面して』と題し、一億一家を標榜して國民の總團結を促し、以てこの重大時局に當らんことを強調し、最高度國防國家の建設を提唱した。

第二十九回理事會議事

新たに顧問制を設く

同盟第二十九回理事會は六月二十六日午前十一時帝國ホテルに開催された。出席理事三十一名、理事會長高石眞五郎氏議長席に着き直ちに議事に入り、左記議案を異議なく可決、正午散會した。今回の理事會議案中の重點は十八年度收支決算の承認であるが、同時に本社に顧問を置き、報道陣の長老五氏を同盟顧問に推挙委嘱したことが注目される。

一、理事異動の件
二、昭和十八年度收支決算の件
三、諸般の報告

産報分會彙報

産報青年隊基本教育

同盟産報青年隊は七月三日より十五日まで二週間に渉り、山本總隊長指揮の下に久保團長教官となり、毎朝七時半より一時間、銃剣術及び銃基本教育を實施し多大の成果を修めた。

丸の内産報へ派遣

丸の内産報支部では今年度青年隊指導者教育を六月二十四日より四日間、戦技訓練を主として實施したが、同盟産報よりは岩崎忠治君加藤大元一郎君が代表參加した。

郷軍點呼練習教育

郷軍同盟分會では、五月二十九日以来、點呼練習教育を兼ねて、赤堀中尉(整理部)を主任教官とし十九年度徒手銃基本教育を實施したが、午前午後の二回に亘り、

間を置く件は昭和十九年三月二十四日開催の第二十八回理事會にて承認を得、且つその人選は古野社長及會長に一任されたるを以て光永星郎氏、小森七郎氏、田中郡吉氏、正力松太郎氏、緒方竹虎氏

以上五氏を推挙する旨を報告し、一同之を諒承したり。

本社職制一部改正

なほ本社においては、別項の如く理事會における本社顧問推挙決定に伴ひ、本社職制第三條を左の通り改正した。

第三條 本社ニ顧問及參與各若干名ヲ置クコトヲ得

顧問ハ社長ノ諮問ニ應ジ重要ナル社務ニ參劔シ參與ハ社長ノ命

ヲ承ケ重要ナル社務ノ審議又ハ處理ニ従事ス

名古屋支社の

防空報道訓練

在名報道陣非常綜合演習は五月二十八日午前八時から實戦さながらの眞剣さで施行された。この日同盟名古屋支社では午前七時十分警報發令と共に、支社員全部戦闘配置につき八時敵機襲撃と共に無線、専用電話、編輯など地下室に移動執務、原稿時刻々中部日本に連絡したが遂に社屋は數回にわたる爆撃で大破炎焼、機能停止するに至つたので中部日本と同一行動をとり約二キロ離れた本館に移動するに決し、八時五十分先づ無電係、通信部員五名が無電機携行出發、他に非常持出の書類器材等を

搬出、九時十五分無電班本館着、二十五分、大本營發表を受信、これを中部日本本館工場で號外に印刷、配給會が市内一千ヶ所に貼出した。編輯部も實戦即應の想定下に記者を活動させて情報蒐集、人心安定の對策を講じ、これと併行して消火、救護の猛訓練を全員に實施、正午大成功裡に演習を終了した。この日名古屋師團長、參謀長をはじめ軍官關係者多數前後二回にわたり支社を視察、つぶさに演習の實況を檢査した。

- 同盟記者團 報道戰士行賞**
- 支那事變當時海軍特派員として報道戰線に活躍したわが社左記職員に對し行賞の御沙汰あり一同を代
- 賜品四號木杯記章
 - 賜品五號 記章
 - 旭八記章
 - 瑞八記章
 - 賜品三號 記章
 - 賜品四號 記章
 - 村山 有
 - 中田 義次
 - 柴田 勝春
 - 前田 雄二
 - 猪伏 清
 - 新井 正義
 - 田中 盛文
 - 被川 親茂
 - 白尾 干城
 - 横地 倫平
 - 樋口 憲吉
 - 中村 伸康
 - 牧島 貞一
 - 一色 義忠
 - 田中 啓次

非常な好成绩で此の程終了した。本教育は、下士官上等兵隊を總動員し、全會員を對照とし、三ヶ月に跨つた徹底した訓練であつたが編輯局長萩野伊八君は一未教育會員として參加し、無遅刻無缺席で赤堀中尉、林軍曹、岩崎軍曹、持田軍曹等の假借なき猛訓練を受け、軍紀嚴正、演練精勵、非常時局に處する操縦者として、身を以て範を示し、教官の千萬言にも劣らぬ教訓を若い社員に與へた。

尚稲本、長谷川兩局長、田中、牧内、藤川、村田、竹中、瀧口、三輪の各部長等も元氣一杯、全身に汗して訓練に參加した。

七月八日大詔奉戴日の朝まじき、郷軍同盟分會は、同盟産報本隊、女子總隊、青年總隊と共に、日比谷公園に勢揃ひして武裝整々しく分會旗、喇叭手を先頭に行軍を開始し、先づ二重橋前に進み、君が代の喇叭吹奏も莊重に遙拜を終り

八時歩武堂々宮城前出發、六軒行軍を實施し、内濠に沿つて靖國神社に參拜、さらに産報各隊と別れ淋漓たる汗を拭ふ間も無く牛藏門に向つて前進し、一名の落伍者も無く九時日比谷公園に歸還した。

此の行程六軒餘、此の強行軍を七月烈日の下、炎熱に挑戦、完遂したことはさすがに時局下、會員の緊張を示すものであらうか。尚同日は、産報各隊の先頭に在つて全員を鼓舞激勵した古野社長より聲浪共に下る底の訓辭を聴き、時局下、感銘も深く、大いに心身を鍊磨して、祖國非常の秋に備ふべく覺悟を新にして直ちに自己の職場に就いた。

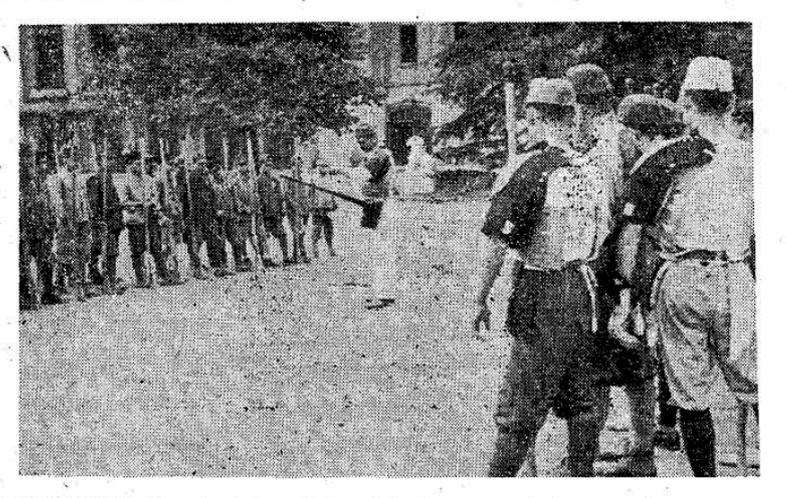
郷軍幹部統率術教育

郷軍同盟分會は、七月三日、四日十日、十一日の四日間、青年隊統率術基本訓練を機會に厚生省體育官増田秀夫氏を招き、郷軍幹部に對し教育法に關する教育を實施したが、第一日同氏は陸軍戸山學校

教官時代の研鑽に物言はせ、公會堂に美技を振つて、劍道、銃劍道の型を示し、參戰の古野社長、大平局長以下同盟幹部、郷軍、産報各會員を感服させたが、引續き公園廣場に於て連日懇切なる指導を行ひ、寄與するところ甚大であつた。尚郷軍幹部は最後に同體育官審判の下に試合を實施し、烈日の下、萬丈の氣を吐いた。(寫眞)

郷軍近藤君美譽

編輯局政經部勤務社員近藤正彦君は、先般名譽の召集令狀を受け取り、日頃病弱を押して練習を遂げたる男兒の冥利此の時と許り、勇躍し、筆劍一如と古野社長が大書して君に贈つた國旗を肩に、双腕して君に贈つた國旗を期して應召したのであるが、整理部在勤當時より、夜を日に繼いだ激務精勵は甚だ君の健康を傷けるたる爲、今は惜しくも即日歸郷を命ぜられ暫時静養練成して再度の應召を待つこととなつたが、同君は之を口



訂正 六月號 本紙三面所載 一平井支部長 閣下同盟分會 査閱なる記事は「巡視」の誤りにつき訂正致します

相良君の英靈に應ふ

馬來軍政監部宣傳部 仲村喜一
陸軍一等兵(元東亞部員)

征戰

滿二週年記念日を控へた昨秋十一月二十日の朝、應召中の私は、はからずも同盟通信報十月號で相良一雄君の戦死を知り、全身痺れるやうな驚きの身震ひを覺えた。相良君と私は今次大東亞戰勃發の直前、同盟から前線へ一兵卒として、生死を共にしてきた社友であり、戦友であつたからである。

應召

二年前の丁度この日、この朝、さきに病死された元同盟シガポール支局長小林猪四郎氏と君と僕との三人が、奇しくも我が同盟から通譯要員といふ特殊任務を以て晴れのお召しに預かり、時を同じうして〇〇に落合つたのも束の間

經歷

元シガポール支局長勤務といふだけで、マライ語の通譯に召された君は

枕木が一本、それが非常に疲れ切つてゐるやうに見えた。私が立つてゐる歩廊とは反対側なので、電車がこの驛に停つたらあの枕木はどんな恰好になるだらう。それを見届けたくなつて、私は自分の乗つて行く車を一瞥見送つて待つた。やがて反対側に電車が来て停つた。私はしがやんで弱々しい枕木を凝視した。案の條その枕木はレールの外側にはみ出した部分一

〇〇部隊にあつて、同じ社の一ツ釜の飯を喰つて出て来たことが、どんなに二人を力強く結びつけてゐたことか。

對流

小林氏は即日〇〇となり、私等二人はどんなに淋しがつたことか。豫備少尉の肩書をもつ小林氏だけが、當時二等兵である私等の失望は大きかつた。

枕木

停る箇所が決められてゐるので、枕木もつらい奴はいつでもつらいし、樂な奴はいつでも樂をしてゐるわけである。私が見たそれとも思ひをさせられてゐる一本で、それだからあんなに疲れてしまつてゐるのだなと氣がついた。

社會部

私は注意して、興味をもつて、こんな電車が動き出す時の枕木の姿をもう一度じいつと見つけた。すると、どうであらう。疲れ切つてゐる枕木の兩側(縦からみれば前後だが)の見るからに健全さうな二本が、電車の車輛が上を

通る時にはぐつと力を入れて、真中の弱々しい奴を二人で助け加へてゐるやうな恰好になる。電車が停つてゐる間頭をもたげて悲鳴をあげてゐるかのやうに見えてゐた一本は電車が動き出すと頭を元へもどして兩脇に居る同僚の情

マライ語は駄目だから精だが敵性語でやるといつて親譲りの英語を得意に驅使してゐた。同盟の名に

笑顏

君が嘗てはベンを持ち、そして銃を執り、昔烈の秋、われ亦君に續かん。滅私の誓ひを新にして君の英靈に應へんのみ。今や僕等の生命は、肉體は、知識は、すべて

忠魂

荒野に鉄を揮ひ 食糧増産に敢闘 新緑の若葉に燃ゆる白樺の林、石南花とフレッジが所狭きまで一面に敷詰められてゐる。牛がのどかに草を食む。正に一幅の繪になりさうな北方風景

豐原支局

幾度か挫けさうになつた心を勵まし合つて闘つた。 「こんなことで北方農民に申譯が立つか」

ともあれ全員汗の敢闘一週間でどうやら馬鈴薯一反歩の蔭付けを終つて一段落をつけた。だがわれわれの増産敢闘はまだこれからである。土地はいくらでもある。收穫の高は別問題として見渡す限りの石南花畑を今に見事馬鈴薯畑と化してみせるぞ。

そして君は更に南への前線へ、同盟精神に結ばれた私等一人は皇國勇士として、ひたすら敢闘を誓ひ合ひ、再會の日を楽しみに相別れて幾月ぞ。しかるに君のみ名譽の戦死を遂げられようとは……

笑顏

君が嘗てはベンを持ち、そして銃を執り、昔烈の秋、われ亦君に續かん。滅私の誓ひを新にして君の英靈に應へんのみ。今や僕等の生命は、肉體は、知識は、すべて

忠魂

荒野に鉄を揮ひ 食糧増産に敢闘 新緑の若葉に燃ゆる白樺の林、石南花とフレッジが所狭きまで一面に敷詰められてゐる。牛がのどかに草を食む。正に一幅の繪になりさうな北方風景

豐原支局

幾度か挫けさうになつた心を勵まし合つて闘つた。 「こんなことで北方農民に申譯が立つか」

ともあれ全員汗の敢闘一週間でどうやら馬鈴薯一反歩の蔭付けを終つて一段落をつけた。だがわれわれの増産敢闘はまだこれからである。土地はいくらでもある。收穫の高は別問題として見渡す限りの石南花畑を今に見事馬鈴薯畑と化してみせるぞ。

荒野に鉄を揮ひ 食糧増産に敢闘 新緑の若葉に燃ゆる白樺の林、石南花とフレッジが所狭きまで一面に敷詰められてゐる。牛がのどかに草を食む。正に一幅の繪になりさうな北方風景

豐原支局

幾度か挫けさうになつた心を勵まし合つて闘つた。 「こんなことで北方農民に申譯が立つか」

忠魂

荒野に鉄を揮ひ 食糧増産に敢闘 新緑の若葉に燃ゆる白樺の林、石南花とフレッジが所狭きまで一面に敷詰められてゐる。牛がのどかに草を食む。正に一幅の繪になりさうな北方風景

豐原支局

幾度か挫けさうになつた心を勵まし合つて闘つた。 「こんなことで北方農民に申譯が立つか」

ともあれ全員汗の敢闘一週間でどうやら馬鈴薯一反歩の蔭付けを終つて一段落をつけた。だがわれわれの増産敢闘はまだこれからである。土地はいくらでもある。收穫の高は別問題として見渡す限りの石南花畑を今に見事馬鈴薯畑と化してみせるぞ。

人事異動 (五・六月分)

(括弧内は發令日附)

ブキチンギ支局長兼パダン支局長副參事 久野 茂男
ブキチンギ支社長心得兼パダン支局長ヲ命ス(五・二七)
聯絡局勤務參事 蒲田 基
編輯局整理部電字班主任兼聯絡局勤務ヲ命ス(五・二二)

編輯 松村 政美(水戸) 一・二五
同 安達安次郎(浦和) 三・四
同 坂井 義房(千葉) 三・四
同 岸江 憲一(海外) 四・四

同 林 宏昭(同) 六・二三
同 平井 眞澄(同) 六・二三
同 金井義光(南方) 六・二三
同 太田 誠(マニラ) 六・二三

川幸、伊澤富江、(甲府)武藤靖、(岐阜)中村道雄、伏見正一、小川喜美、(山口)岡田靜子、金本玲子、(編輯)清水不二夫(以上七・冬通)

齋木兼次郎三男、金子利雄二女、經濟、仲功長女(總務)、長濱純一長男(海外)、伊東房慶三女、巖後緒長女(海外)、五十嵐友幸二女(戰調)、猪坂正春長男(札幌)、山口重藏第五子(銚路)、中山日東男長女(蘇州)、小林春雄長男(天津)、松山爲之長男、河野正孝二女(華中)、大橋茂長女(華北)

△出 齋木兼次郎三男、金子利雄二女、經濟、仲功長女(總務)、長濱純一長男(海外)、伊東房慶三女、巖後緒長女(海外)、五十嵐友幸二女(戰調)、猪坂正春長男(札幌)、山口重藏第五子(銚路)、中山日東男長女(蘇州)、小林春雄長男(天津)、松山爲之長男、河野正孝二女(華中)、大橋茂長女(華北)

△退 池田純一(編輯)、大木武次郎(技研)、市原梅喜(福岡)、高村葉子(山形)、二宮ノブ(濟南)、白土まゆみ(飯塚)等(華中)